

2007年出土の木簡



山形・服部遺跡

服
はつ
立ア
と

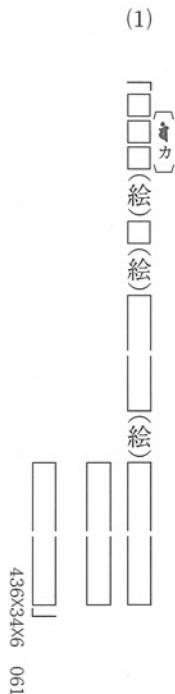
- | | |
|-------|--|
| 所在地 | 山形市大字中野字服部 |
| 調査期間 | 第一次調査
一九九九年（平11）五月～一月 |
| 発掘機関 | 財山形県埋蔵文化財センター |
| 調査担当者 | 渡部利之・水戸弘美・藤野周助 |
| 遺跡の種類 | 遺跡の年代
弥生時代～江戸時代
集落跡 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |
| 6 | 服部遺跡は、馬見ヶ崎川扇状地外縁部の自然堤防上に位置する。 |
| 5 | 北側に接する藤治屋敷遺跡は、検出遺構の内容から服部遺跡と一連
と考察される。両遺跡の微 |
| 4 | 高地には、奈良・平安時代
の掘立柱建物・土坑が集中 |
| 3 | し、その微高地を縫うよう
に流れる河川が検出された |
| 2 | 河川からは、古墳時代前期
の土師器・木製品、奈良・ |
| 1 | 平安時代の土師器・須恵器
が出土した。 |

7 6
遺跡の年代 弘生時代・江戸時代
遺跡及び木簡出土遺構の概要

服部遺跡は、馬見ヶ崎川扇状地外縁部の自然堤防上に位置する。北側に接する藤治屋敷遺跡は、検出遺構の内容から服部遺跡と一連

高地には、奈良・平安時代の掘立柱建物・土坑が集中し、その微高地を縫うように流れる河川が検出された。河川からは、古墳時代前期の土師器・木製品、奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した。

8 木簡の釈文・内容



- (2) (3) (4)
「南天阿彌陀仏
〔阿彌陀力〕
(325)×225×3
(354)×195×4
061」

木簡は、井戸 SE一一〇から五点出土した。SE一一〇は、平面が二四〇cm×二一八cmの南北に長い楕円形で、北側に方形の掘り込みがある。断面はロート状で、深さは九六cmを測る。埋土は、下位の約七〇cmが人為堆積、細砂層を挟んで上位二〇cmが自然堆積である。泥炭化した最下層から、木簡五点と板状木製品一点が出土した。奈良・平安時代の河川埋土を掘り込むことや、周辺の遺構から一二世紀後半、一四世紀後半～一五世紀後半、一五世紀後半～一六世紀前半の遺物が出土しており、木簡の時期は中世と考えられる。

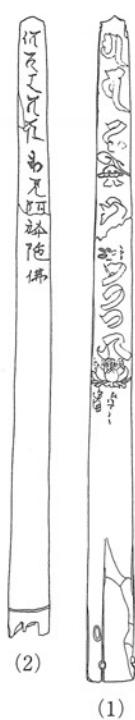
(1)～(5)は、笛塔婆である。上端は圭頭を呈し、下端は(1)以外破損している。材は、スギ材の柾目である。(1)は、上端に左右二段の切り込みが深く入り、裏面に段がある。下端に釘孔状の孔が三ヵ所確認できる。表面の上半に梵字と蓮の絵、下半に文字三行が墨で書かれていると推定される。(2)～(5)は、上端に浅い切り込みが入り、表面に「空風火水地」を示す梵字と南無阿弥陀仏が墨で書かれている。

なお、木簡の釈読にあたっては、山形大学の三上喜孝氏のご教示を得た。

9 関係文献

(財)山形県埋蔵文化財センター『服部遺跡・藤治屋敷遺跡第一次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書一、二九、二〇〇四年)

(高桑弘美)



秋田・古川堀反町遺跡

ふるかわほりばたまち

所在地	秋田市千秋明徳町一丁目
調査期間	二〇〇五年(平17)三月～七月
発掘機関	秋田県埋蔵文化財センター
調査担当者	山村 剛・菊池 晋ほか
遺跡の種類	武家屋敷跡
遺跡の年代	江戸時代

遺跡及び木簡出土遺構の概要

古川堀反町遺跡は、秋田市街地の中心部に位置し、久保田城外堀の西側にあたる。今回の調査は、秋田中央警察署改築事業に伴うもので、調査面積は一六九〇m²である。



(秋田)

遺跡の名称にもなった町名は、城下町建設期に堀替えをし、現在外堀となつた旧旭川(古川)沿いにあることに由来する。江戸時代を通じ、家老職小野岡氏や根本氏をはじめとした上・